科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月16日現在

機関番号：24402
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2008～2011
課題番号：20520419
研究課題名（和文）　視点と基準点の諸問題

研究課題名（英文）　Problems of viewpoint and reference point

研究代表者
丹羽 哲也（NIWA TETSUYA）
大阪市立大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：20228266

研究成果の概要（和文）：日本語視点・基準点に関わる問題の中で、主として次の二つの問題について成果を得た。（１）名詞を中心とする構文、すなわち連体修飾表現において、助詞「の」の意味用法、連体節と「名詞＋の」との関係、被修飾名詞の意味的な分類、現代語と中古語との構造上の相違といった問題について新たな知見を得た。（２）近世の浄瑠璃詞章において、敬語表現などがどのような基準・視点から選択されるかという問題を考察し、文法だけでなく文体的側面の重要性を示した。

研究成果の概要（英文）：Among the problems of viewpoint and reference point in Japanese, I chiefly showed the results concerning the following two problems. (1) In nominal-centered constructions, namely, noun modifying expressions, I gained some new insights into the meanings and usages of the particle no, the relationship of noun modifying clauses and "noun + no" phrases, the classification of the meanings of modified nouns, and the structural differences between modern Japanese and Heian period Japanese. (2) I examined the criteria and viewpoints involved with the choice of honorific expressions etc. in Jôruri texts of the Edo period, and demonstrated the importance of not only grammatical but also stylistic aspects.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	400,000	120,000	520,000
2010年度	400,000	120,000	520,000
2011年度	400,000	120,000	520,000
年度			
総　計	1,900,000	570,000	2,470,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学・日本語学
キーワード：文法、

１．研究開始当初の背景

申請者は、久しく、日本語の助詞「は」等によって表される主題について研究しており、その成果を『日本語の題目文』(2006年、和泉書院）として出版した。また、タ形を中心とするテンス・アスペクトについての研究も進め、いくつかの論文を公刊している。これらの研究過程のなかで、問題の考察をより深化させていくためには、視点や基準(点)という概念がどのようなものであるか、より詳しく検討する必要があると思い至った。これらの概念は、様々な領域で様々に用いられてお

り、その内実がどのようなもので、それらがどのように関連するのか、よくわかっていない。それ故、これらに関わる諸問題を基礎的なところから考察することにした。

また一般に、文法研究を推し進めるためには、隣接領域である文体の問題を考慮に入れる必要性が高い。しかし、文法と文体の関係も漠然としたままであり、基礎的な研究を積み重ねる必要がある。本研究では話し手（語り手）の視点という面からこの問題に取り組もうと考えた。

２．研究の目的

視点、基準点という概念の内実を明らかにするための基礎的な考察として、様々文法現象の中で、どのようなところに視点・基準点に関わる問題が潜んでいるかを見出し、それらの相互関係を考察していくことを目的とした。

３．研究の方法

特に名詞を中心とする文構造、すなわち、連体修飾構造に重点を置き、そこに用いられる名詞、特に相対名詞・抽象名詞を数百個選んで用例を収集し、名詞の意味が連体修飾構造とどのように関係するかということを詳細に考察した。この中には、現代語とともに、中古語についても用例を収集し、現代語との比較を行った。

近世の浄瑠璃作品『菅原伝授手習鑑』『義経千本桜』などを語学的観点から読み解き、敬語や人称詞の用いられ方や、文語表現と口語表現との使い分けについて、用例を収集し、文法と文体の両面から分析した。

４．研究成果

（１）連体修飾に関する研究

①連体助詞「の」の用法は複雑多岐にわたるため、その類型化があまり進んでいない。本研究では、「修飾名詞＋の＋主名詞」という構造について、個々の具体的な意味関係の多様さを越えて、修飾名詞が関係を内在するタイプ（「独身の女性」）、主名詞が関係を内在するタイプ（「私の母」）、どちらも関係を内在しないタイプ（「太郎の本」）の三種類のタイプに大別されること、その三者が相互に連続し、そこに名詞の意味だけでなく、推論の幅や百科辞書的知識など運用論的な側面が関わることを明らかにした。また、「の」の関係が文脈によって自由に関係を構成すると言われる（例えば「太郎の写真」が「太郎の撮影した写真」「太郎の写った写真」「太郎の所有する写真」のように多義的に解釈される）ことがあるが、それが成り立つのは、上の三つ目のタイプの場合において言えることであり、かつ、そこには関連性理論で示されるような運用論的な原則だけでは説明できず、修飾名詞と被修飾名詞の間の意味的な関係に一定の制約があるということを示した。

②連体修飾節の中で「旅行に行く準備」「食事をした後」など相対補充と呼ばれる修飾関係について、それが古代語と現代語において表し得る範囲が異なるという問題がある。すなわち、古代語においては、例えば「幼き御後見」という表現が「幼い御後見人」という意味ではなく、「幼い人の御後見人」という意味で成り立つ。このようなタイプの相対補充節が存在する事情について、これまで注意が払われたことがほとんどなかったが、本研究において、主名詞が相対名詞（関係概念を表す名詞）であることと、準体節という構文が古代語に存在したこととを関係づけることによって、上記の関係が成立し得ることを明らかにした。

③連体節による連体修飾と助詞「の」による連体修飾とは、従来別々に考察されてきて、両者の関連が明らかになっていない。連体節は、通常の文に転換可能か否かという基準で「内の関係」と「外の関係」に分類する（例えば「旅行に行く人」は「その人が旅行に行く」と転換可能だが、「旅行に行く準備」は転換不可）のが通説だが、この方法では「の」による連体修飾を扱うことができない。本研究では、主名詞が相対名詞か否か、また、修飾節と主名詞とがどのような意味関係を結んでいるかという観点から捉え直し、連体節による修飾と「の」による修飾とが、共通して、「属性関係」「構成要素関係」「事物補充関係」という三種類に分けられることを示した。

④連体修飾節構造において相対補充節と内容補充節の両方を取る名詞は、内容補充と相対補充とが別々に表されるタイプ（独立型）と、内容補充と相対

補充とが重なり合う関係にあるタイプ（重なり型）とに分かれる。「独立型」は「飲酒運転が減らない原因」(相対補充)と「罰則が軽すぎるという原因」(内容補充)のように両者は明確に区別できるが、「何でも頼れる安心感」のような「重なり型」は、「安心感」の内容が「何でも頼れる」であるとも、「安心感」の原因が「何でも頼れる」であるとも解釈でき、両者は区別できない。このような区別は特殊なものではなく、相対補充が表す「原因、寄与、結果、反応、側面、範列」という多様な意味関係の広い範囲において成り立つということを、数百個の相対名詞を調査することによって明らかにした。

（３）アスペクトに関する研究

テンス・アスペクト形式における「基本形・タ形・テイル形・テイタ形」という基本的な対立の中で、タ形（「本を読んだ」）とテイタ形（「本を読んでいた」)の対立がどのようなものであるかという問題は、他の対立に比べて、なお研究が少ない。本研究は話し手の視点という面からこの問題を考察した。従来、タ形とテイタ形との使い分について、その文の表す事柄が瞬間的か継続的か、前後の文の表す事柄と同時的か順次的かという要因が指摘されているが、それだけでは説明できないことも多く、話し手が動きに着目するか、状態に着目するかという、関心の置き方に左右される面が大きいということを示した。

（３）浄瑠璃の詞章における文法と文体に関する研究

①敬語表現の歴史において、絶対敬語から相対敬語へという変遷があることが知られているが、本研究は、高身分の悪人に対して敬語を使うか否かという問題を提示し、近世の浄瑠璃の詞章においては、敬語を使う絶対敬語的用法よりも、敬語を使わない相対敬語的な用法の方が顕著で、それは敵役の造形という演劇的性格に由来するということを明らかにした。

②日本語には人称詞が豊富に存在するが、近世期には、それら（一人称「わたくし、わし、拙者、それがし」等、二人称「お前、こなた、そなた、そち」等）の使い分けが、男女差はもちろん、武士階級か町人階級かという身分による相違が大きいことが知られている。そのような大枠の上で、本研究では、浄瑠璃作品の使い分けのありようを考察し、登場人物の役割や感情の変化に伴って人称詞の使い方も変化することを示した。

③浄瑠璃作品の会話文には、文語形と口語形とがともに用いられている(「別れし時／別れた時」「申さん／申さう」等）これらが、どういう基準や視点によって使い分けられているかという選択のありようを考察し、登場人物の身分や性別だけでなく、聞き手や場面状況との関係に大きく左右され、また、演劇的効果をねらっての文体の選択も絡みあっていることをを示した。

（４）研究の進捗状況と課題

①申請時の意図としては、基準点についての考察を進める中で、その中のどのような部分が視点と呼び得るのか、その関係を考察するという目標もあったが、実際には基準点に関わる研究に終始し、視点にまで具体的に考察を進めることができなかった。一方で、中心的に研究した連体修飾構造の領域では、意味的な基準となるのが修飾部分にあるのか、被修飾名詞の側にあるのかという観点を導入することができた。それにより、相対補充修飾と言われる構造の類型化や中古語の連体修飾構造の特徴、あるいは、「名詞＋の」による連体関係と修飾節による連体関係との統合といった問題について、有意な知見を得ることができた。

②申請時の意図としては、視点・基準点という観点から、文法の諸領域を横断的に見渡すということもあったが、連体修飾の研究が主となって、扱うことができた他の領域としては、テンス・アスペクトおよび敬語など文体に関わる領域に留まった。今後の進め方として、諸領域を有機的に結びつけていくために、連体修飾の研究で行いつつある相対名詞・抽象名詞の意味と構造の関係を詳細に見るという方法を他の領域に拡大していくというアプローチを取る予定であり、具体的には、存在文・名詞述語文・題目文といった領域を取り上げていく。この研究については、2012年度から、基盤研究(C)「名詞の関係性を中心とする文法と意味の

記述研究」という研究課題名で進めていくことが決まっている。
③浄瑠璃作品を材料とする研究においては、敬語形式の選択に、演劇的観点も関わっているといった知見を得ることができたが、申請者のこの分野に対する造詣が浅いので、なお課題は多い。この研究は、発表の場を勤務先主催の市民講座およびそれをもとにした出版物に得ており、研究成果の社会への還元という点では有意義であると思われる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計4件）
① 丹羽哲也、連体節と連体「の」との対応、文学史研究、51号、pp.44-58、2011年、査読有
② 丹羽哲也、相対補充連体修飾の構造―準体節との対応―、日本語の研究、6巻4号、pp. 95-109、2010年、査読有
③ 丹羽哲也、連体助詞「の」の用法記述のために、人文研究 大阪市立大学文学研究科紀要、61巻、pp.81-111、2010年、査読有、http://dlisv03.media.osaka-cu.ac.jp/infolib/meta_pub/CsvSearch.cgi（大阪市立大学、紀要論文データベース）
④ 丹羽哲也、『菅原伝授手習鑑』における敬語・無敬語、上方文化講座 菅原伝授手習鑑、pp.160-168、2009年、査読無

〔学会発表〕（計8件）
① 丹羽哲也、連体修飾「外の関係」より見た名詞の一分類、日本語文法学会、2011年12月3日、東京外国語大学
② 丹羽哲也、浄瑠璃の言語―上方語の変遷の仲の『生写朝顔話』―、上方文化講座、2011年8月25日
③ 丹羽哲也、連体修飾の分類と主名詞の性格、形式語研究会、2010年12月12日、国立国語研究所
④ 丹羽哲也、浄瑠璃の言語―『一谷嫩軍記』にみる登場人物の言葉遣い―、上方文化講座、2010年8月25日、大阪市立大学
⑤ 丹羽哲也、相対性連体修飾節の意味構造、日本語学会、2009年11月1日、島根大学
⑥ 丹羽哲也、浄瑠璃の言語―『仮名手本忠臣蔵』に見る登場人物の言葉遣い―、上方文化講座、2009年8月27日、大阪市立大学
⑦ 丹羽哲也、タとテイタ、形式語研究会、2008年9月28日、龍谷大学
⑧ 丹羽哲也、浄瑠璃の言語―『義経千本桜』における自称詞と対称詞―、上方文化講座、2008年8月28日、大阪市立大学

６．研究組織
(1)研究代表者
丹羽哲也（NIWA TETSUYA）
大阪市立大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：20228266

(2)研究分担者
なし
(3)連携研究者
なし